

Society5.0 とa nation of men blind from their infancy

著者	野村 知清
著者別名	Nomura Tomokiyo
雑誌名	国際哲学研究
巻	別冊13
ページ	57-71
発行年	2020-03
URL	http://doi.org/10.34428/00011548

Society5.0 と a nation of men blind from their infancy

野村 智清

1 節 はじめに

本稿では Society5.0 に基盤を与える AI をいかなる基準で評価すべきかについて示唆を与えることを目的として設定する。

そしてこの目的を遂行するために、パークリによる幼少より目が不自由な人の国 a nation of men blind from their infancy についての議論（以下幼少より目が不自由な人を BI、パークリによる幼少より目が不自由な人の国についての議論を NBI）とそれを巡る考察を参照する。

Society5.0 に基盤を与える AI と NBI というミシンとこうもり傘ほど異なる事柄を並置する方法を採るには、次のような理由がある。手術台となるのは、両者の類似性である。後に確認されるように、Society5.0 に基盤を与える AI と NBI に基盤を与える存在者は、前者がこれから備えるべきであり、後者が既に備える性質という観点から類似している。この類似性は、パークリによる NBI を巡る考察が Society5.0 に適用可能であることを示している。これらのことを踏まえて、本稿では、NBI とそれを巡るパークリによる考察を参照することで、Society5.0 に基盤を与える AI を評価する基準についての示唆を与えることができると判断した。

この目的設定の背景は以下のように述べることができる。令和元年 10 月 26 日に開催された研究活動再開に伴う東洋大学国際哲学研究センターキックオフミーティングで松浦和也共同代表は、「哲学研究とこれからの社会」と題する講演をおこなった。この講演では、22 世紀の哲学構築に向けて、AI、ロボット、あるいはサイボーグといった先進技術に対して哲学がとるべき立ち位置が論じられた。そのなかで AI、ロボット、あるいはサイボーグを実際に制作している現場の研究者たちが、現時点において哲学を含めた人文学に対して抱いているニーズをくみ取ることの重要性が指摘された。そして具体的な現場の科学者たちのニーズとして、ある種の人間のモデルを提示が人文学には求められているとされた。

本稿ではこの指摘を鑑み、第 5 期科学技術基本計画を取り扱った。第 5 期科学技術基本計画を取り扱うことは、本稿が次のようにして現場の研究者たちのニーズを二重にくみ取ることとなる。

内閣府の web ページに依れば¹、「平成 7 年に制定された科学技術基本法により、政府は科学技術基本計画を策定し、長期的視野に立って体系的かつ一貫した科学技術政策を実行することと」されている。これは科学技術基本計画が現時点で現場の研究者たちがおこなうべきことの指針とされていることを意味している。また Society5.0 は本稿執筆時に進行中である第 5 期科学技術基本計画で、その実現が目標として掲げられている。これらのことから Society5.0 が基盤とする AI を評価する基準について示唆を与えるという本稿の目的は、現場の研究者たちのニーズを一定程度はくみ取っていると言える。

さらに示唆を与える過程で本稿は、知識を巡る人間と社会についての一つのモデルを提示することとなる。このことは「哲学研究とこれからの社会」に則れば、現場の研究者たちのニーズに応えることであるとも言える。

本稿は具体的には以下のような手順で分析が展開される。2 節では内閣府が示す Society5.0 がもつ本質的な側面を確認することで、その基盤となる AI が本質的に備えていなければならない性質を明らかにしていく。3 節では NBI を巡る考察を参照する準備段階として、NBI がもつ構造は明らかにされる。4 節では 3 節で得られた NBI がもつ構造に基づいて、NBI を巡る考察が参照される。そして 5 節では Society5.0 に基盤を与える AI の評価についての示唆が NBI を巡る考察から引き出される。

2 節 Society5.0 が基盤とする AI が備えるべき特質

本節では第 5 期科学技術基本計画、その概要、及び内閣府の web ページでの記述内容を読み解くことによって、Society5.0 が AI を基盤としていることをまず確認し、その後で Society5.0 が基盤とする AI が備えていなくてはならない三つの性質を抽出する。そしてそれらを Society5.0 が基盤とする AI が備えるべき特質としてまとめていく。

平成 28 年 1 月 22 日に平成 28～32 年度の第 5 期科学技術基本計画は閣議決定された。第 5 期科学技術基本計画では、「科学技術イノベーション政策を、経済、社会及び公共のための主要な政策として位置付け強力的に推進する」とされている²。具体的にはその目標の一つとして「人々に豊かさをもたらす「超スマート社会」を未来の姿として提起」することが謳われている³。この「超スマート社会」が Society5.0 である。

内閣府の web ページに依れば、Society5.0 という概念では、現在の情報社会を Society4.0 として、それ以前に現れた社会システムそれぞれを狩猟社会は Society 1.0、農耕社会は Society 2.0、工業社会は Society 3.0 とする。そして Society4.0 である情報社会では、「知識や情報が共有されず、分野横断的な連携が不十分であるという問題」があったとされ、この問題を解決して成り立つのが Society5.0 であるとされている⁴。

Society4.0 がこの問題の解決に至らなかった原因は、「あふれる情報から必要な情報を見つけて分析する作業」を「人が行う能力に限界がある」ことに帰されている⁵。そして逆に Society5.0 ではそれが解決される理由としては、「膨大なビッグデータを人間の能力

を超えた AI」の実現が挙げられている⁶。

これらの記述内容から以下の事柄を抽出することができる。まず Society5.0 は AI を基盤としている。つぎにその AI は Society5.0 が成立するためには人間を超えた能力をもっていなければならない。これを Society5.0 が基盤とする AI が備えていなくてはならない性質 1（以下性質 1）とすれば、次のようになる。

＜性質 1＞：人間を超えた能力をもつ

既にみてきたように性質 1 を原因として、Society4.0 では解決できなかった「知識や情報が共有されず、分野横断的な連携が不十分であるという問題」が解決されて、Society5.0 が成立する。そのように成立する Society5.0 の具体的な姿を「第 5 期科学技術基本計画の概要」と内閣府の web ページで確認していこう。

「第 5 期科学技術基本計画の概要」では「世界に先駆けた「超スマート社会」の実現」という文言にカッコ書きの朱書きで Society5.0 と付されている⁷。そして「サイバー空間とフィジカル空間（現実社会）が高度に融合した「超スマート社会」を未来の姿として共有し、その実現に向けた一連の取組を「Society 5.0」と」するとされている⁸。また内閣府の web ページでは、実現した人間を超えた能力をもつ AI は膨大なビックデータを解析し、「その結果がロボットなどを通して人間にフィードバックされる」と述べられている。さらにこのフィードバックは人間への「提案」や「指示」と呼ばれている⁹。人間への提案や指示が言葉を介しておこなわれると考えるとすれば、性質 1 をもつことによって Society5.0 が基盤とする AI は互いに異なる空間を結び付け、言葉を介して人間に提案や指示をおこなうことで、「知識や情報が共有されず、分野横断的な連携が不十分であるという問題」を解決し、Society5.0 を成立させると言うことができる。このように言うことができるのであれば、Society5.0 が基盤とする AI が備えるべき次のような性質 2（以下性質 2）を抽出することができる。

＜性質 2＞：二つの互いに異なる空間を結び付け、言葉を介して人間に提案や指示をする

もちろんここで言われている「空間」という文言は比喩である。しかし、それが比喩として成り立つためには、実際の空間とも共有されるなんらかの特質が共有されていなければならない。そうだとすれば、性質 2 は実際の空間も含めて「空間」という言葉を用いて表される互いに異なる領域を結び付けることを意味していると言える。

ここで Society5.0 が Society4.0 と袂を分かち Society5.0 として成立するためには、Society4.0 が解決できなかった「知識や情報が共有されず、分野横断的な連携が不十分であるという問題」を解決しなくてはならないとされていたことを思い起そう。すると性

質は将にこの問題を解決するために必要であることを自ずと理解することができる。この意味で性質 2 は Society5.0 が基盤とする AI が備えるべき性質であると考えることができる。

このように性質 1 を原因として性質 2 を成し遂げ、Society4.0 で解決できなかった「知識や情報が共有されず、分野横断的な連携が不十分であるという問題」を解決することで Society5.0 が成立する。内閣府による web ページでは、このように成立した Society5.0 は「これまでには出来なかった新たな価値」を創出するとされている。「これまでに出来なかった」という文言が示すように、この新たな価値の創出は、それまでにない社会という Society5.0 が Society5.0 として成り立つために必須である。このように考えれば、次のような Society5.0 が基盤とする AI が備えるべき性質 3（以下性質 3）を挙げることができる。

＜性質 3＞：新たな価値を創出する

さて性質間の関係を念のために整理すればつぎのようになる。性質 1 を原因として性質 2 は実現し、性質 2 が実現することによって性質 3 が起こる。これらの関係にも留意しながらまとめれば、Society5.0 が基盤とする AI は以下のような特質を備えるべきである。

＜Society5.0 が基盤とする AI が備えるべき特質＞

Society5.0 が基盤とする AI は、＜性質 1＞：人間を超えた能力をもつことによって、
 ＜性質 2＞：二つの互いに異なる空間を結び付け、言葉を介して人間に提案や指示を
 することで＜性質 3＞：新たな価値を創出する

第 5 次科学技術基本計画が進行中である現在では、Society5.0 が基盤とする AI は未だ登場していない。しかし、時代を遡ると Society5.0 が基盤とする AI が備えるべき特質を備えた存在が基盤とした社会が既に選択肢に入っているという主張がある。順を追ってこの主張をみていくことにしよう。

3 節 NBI がもつ構造

本節ではパークリによる NBI を巡る考察を参照する準備作業として、『アルシフロン』第四対話で提示される NBI がもつ構造を瞥見することで、それが基盤とする存在者を明らかにし、Society5.0 が基盤とする AI とその存在者もつ類似性を確認する。

NBI は『アルシフロン』第四対話で示される。『アルシフロン』は 1732 年に出版された。七つの対話からなる対話篇で、主な登場人物は、ディオーン、リュシクレス、アルシフ

ロン、ユーフレイナーそしてクリトーの五人である。ディオンはほとんど発言をせず聞き役に徹している。リュシクレスとアルシフロンはキケロに倣って作中では「小粒な哲学者 Minute Philosophers」と呼ばれる自由思想家の立場を代弁している (Berkeley 1948-1957, Vol. III:46)。一方でユーフレイナーとクリトーは、それに反するパークリの立場を代弁していると解釈されている。

『アルシフロン』第三対話では、神と道德の結び付きが示される。それを受けて『アルシフロン』第四対話では、神の存在証明が提示されている。神の存在証明が提示される『アルシフロン』第四対話は、大きく三つの部分に分けられる。第一の部分では、アルシフロンが動物精気を認めることから、自然の運動の原因としての神の存在が証明される (Berkeley 1948-1957, Vol. III:141-148)。第二の部分では、自由思想家の存在を証明するが、神の存在を決して証明することはない人格や精神の存在の基準として、アルシフロンは言葉を用いて話しかけてくることを挙げる。これを受けてパークリはユーフレイナーやクリトーの口を借りて、視覚は神の言語であるとする説からその言語の話し手として神の存在を証明する (Berkeley 1948-1957, Vol. III:148-162)。そして第三の部分では、神の存在証明を認めたとしても、そこで用いられた言葉の意味が不明確であり、実効性は無いとするリュシクレスによる議論が論駁される (Berkeley 1948-1957, Vol. III:162-173)。

割かれた紙幅からも明らかなように、第二の部分が『アルシフロン』第四対話の中核を成している。NBI は第二の部分の神の存在が証明された後に示されている。アルシフロンは第二の部分で示された視覚は神の言語であるとする説に対して、視覚がそのように驚き仰天すべきものであるならば、一般の人びとはなぜそれに驚かないかという疑問を呈する。それに対してユーフレイナーは次のように NBI を導入する。

アルシフロン：もしそれが本当に〔これまで議論されてきたような〕とても驚き仰天すべき本性であるならば、いまとなっては人びとがいかにしてこの視覚能力にほんの少ししか驚かず仰天していないかを得心することができません。

ユーフレイナー：幼少のころから目が不自由な人の国を想定してみましょう。そこ〔その国〕に国中で唯一見ることができる人間である旅人がやってきます。But let us suppose a nation of men blind from their infancy, among whom a stranger arrives, the only man who can see in all the country; この旅人がこの国の人たちと旅をしていると想定してみます。そしてある時に彼〔旅人〕が〔その国の〕人びとにまっすぐに歩いた場合には 30 分ほどで〔その国の〕人びとは他の人びとや家畜に出会うことや家に行き当たること、もし右に曲がって進めば数分で絶壁から落ちる危険があること、左に曲げれば、同じくらいの時間で川や森あるいは山に着くこと、を予め言ったとしましょう。あなたはどのように考えますか。自分たちの国をいままで訪れたことが無い者がそのようによりよく自分たちよりも国のことを知っていることに

無限に驚くのでしょうか。そしてそれらの予言は、その人びとにとって、小粒な哲学者にとって予言がそうであるように説明がつかず、信じられないものと思われるのではないのでしょうか。

アルシフロン：それを否定することができません。

Berkeley (1948-1957, Vol. III: 161)、□ 内は著者の挿入。

引用箇所での展開を大まかに確認していこう。最初の発言でアルシフロンは自らの疑問を呈する。この疑問を受けて、ユーフレイナーは NBI を導入する。NBI はまず BI のみからなる国が想定される。つぎにそこに非 BI である旅人が登場する。そして旅人は視覚能力を用いて、BI たちにさまざまな提案や指示をすることで、キリスト教の預言者と同じように驚くべき者としての評価を得るとされる。このような NBI に対して、アルシフロンは最後の発言でそれを受け入れる旨を表明している。

NBI の最後で、キリスト教の預言者が登場する唐突さを除けば、NBI の論旨は明確であろう。本稿では紙幅の関係もあり採り上げないが、パークリに先行するアイルランドでの神が備える性質を巡る議論を鑑みれば、その唐突さは減る。というのも当時のアイルランドでは多くの哲学者たちによって、ここでパークリがおこなっているように、神が備える性質がもつ超越性を BI に対する非 BI がもつ超越性と同じであると考えられていたからである¹⁰。

先行するアイルランドでの議論とパークリの繋がりを等閑に付したとしても、この預言者の登場は、NBI がもつ構造を理解するうえで重要である。なぜかと言えば、この預言者の導入は、明示はされていないものの、神の存在が NBI の基盤となっていることを強く指し示すからである。

NBI がもつ構造を十全に理解するために忘れてはならないのは、NBI が『アルシフロン』第四対話の第二の部分の末尾で導入されたことである。既に指摘したように『アルシフロン』第四対話の第二の部分では、視覚が神の言語であるとする説に基づいて神の存在が証明されている。換言すれば、パークリに対する立場に関係無く、すべての登場人物たちは NBI 導入時点で視覚が神の言語であるとする説を前提として考えていると言える。

神は自らの言語である視覚を介した指示や提案を、非 BI である旅人を通して、BI たちに示す。このことは神が人間の言語を介した予言という指示や提案を、預言者を通して、小粒な哲学者たちをはじめとする人間に示すこととまったく同じであると NBI は主張する。というよりもこのような構造をもつことによって、NBI は成り立っていると言える。この NBI がもつ構造を「NBI が内包する関係の相同性」と名付けよう。それは次のようにまとめることができる。

＜NBI が内包する関係の相同性＞

視覚という神の言語を介した神を基盤とする BI と非 BI である旅人の関係＝予言と

いう人間の言語を介した神を基盤とする預言者と預言者ではない小粒な哲学者はじめとする人間の関係

この等号の左右に位置付けた関係を念頭に置きながら、ここで基盤となっている神がそのような性質を備えているかを順次みていくことにしよう¹¹。

まず先ほど述べたように、アイルランドでは神が備える性質が人間のもつ性質に対してもつ超越性は、視覚が BI に対してもつ超越性と同じであると捉える。この捉え方の賛否は置くとしても、このことは NBI で問題とされる神は人間を超えた能力をもつとされていることは動かしがたい。このことから考えて、次のように NBI が基盤とする神は性質 1 をもつと言える。

NBI が基盤とする神は、＜性質 1＞：人間を超えた能力をもつ

つぎに NBI で示される二つの関係それぞれで神は具体的にどのような機能を果たしているかをみていこう。BI と非 BI の関係について考えてみよう。既に指摘したように、視覚が神の言語であるのは、異質な視覚的観念と触覚的観念を結び付けるからである。ここで「観念」という言葉がどのような意味であったとしても、これは互いに異なる視覚的空間と触覚的空間を結び付けていることに他ならない。預言者と小粒な哲学者の関係に目を向けてみよう。この場合に神が預言者を通して、小粒な哲学者に当たるものはキリスト教の預言である。この預言の内には、当然の事ながら、キリスト者になればイエスが再臨した際から永遠の命を得るという来世についての内容が含まれている。このことを考えれば、現世という空間とは異なる来世という空間を神は結び付けていると言える。預言が無ければ、現世が来世との繋がりを失ってしまうという捉え方は次に引用する箇所からも裏書される。

確かに、とクリトーは言い続けました、近代の自由思想家はケケロが小粒な哲学者と呼んだ者たちとまったく同じです。この名前は見事に彼ら〔自由思想家〕に適しています。彼らは、人間の思考、見方、そして希望といったすべての価値ある事柄を減らし、すべての心についての知識、思念、そして理論を感官に還元し、人間本性を動物的生の狭く低い基準へと小さくし墮落させ、そしてわたしたちに永遠の命の代りにわずかな時間を割り当てました。Berkeley (1948-1957, Vol. III:47)、〔 〕内は著者の挿入。

この引用箇所では、自由思想家が『アルシフロン』で「小粒な哲学者」と呼ばれている理由が明らかにされている。それはさまざま分野で、自由思想家は事柄を近視眼的にみてしまっているからだとされている。注目すべきは、最後の理由である。「永遠の命」とい

う文言から明らかなように小粒な哲学者は、もともとは現世という空間のみを生きており、来世という空間との繋がりをもっていない。だからこそ NBI で BI が非 BI である旅人に驚くように、預言者に驚くとされているのである。

さらに視覚が神の言語であるとすれば、NBI が内包する関係の相同性でも示されているように、神は広い意味での言葉を介して人間に提案や指示をするとされている¹²。また預言によって神は言葉を介して、人間に提案や指示をしている。

以上のように考えれば NBI が基盤とする神と性質 2 について次のようにまとめることができる。

NBI が基盤とする神は、＜性質 2＞：二つの互いに異なる空間を結び付け、言葉を介して人間に提案や指示をする

そして NBI では BI も小粒な哲学者をはじめとする人間も驚くとされている。BI と非 BI である旅人の関係についての記述をみれば明らかなように、この驚きは自らには可能でないが、なにか新しく素晴らしいことが実現されたことへの驚きである。このことは BI と非 BI の関係が預言者と小粒な哲学者をはじめとする人間の関係と相同性をもっていること、永遠の命が実現するという預言の内容を考えれば、後者の関係にも当てはまる。このように捉えれば、NBI が基盤とする神について次のように言うことができる。

NBI が基盤とする神は、＜性質 3＞：新たな価値を創出する

これまでの NBI が基盤とする神が備える性質間の関係を整理してみよう。BI と非 BI の関係を採れば、神は人間を超えた能力を原因として、視覚空間と触覚空間を結び付け、視覚という神の言葉を介して人間に提案や指示をすることで、新たな価値を創出すると言える。この関係と相同性をもつ預言者と小粒な哲学者の関係では、神は人間を超えた能力を原因として、現世の空間と来世の空間を結び付け、預言という神の言葉を介して人間に提案や指示をすることで、新たな価値を創出すると捉えることができる。

このように整理できる性質間の関係も踏まえたうえで NBI が基盤とする神をまとめて、比較のために Society5.0 が基盤とする AI が備えるべき特質と並置して示せば以下のようになる。

＜Society5.0 が基盤とする AI が備えるべき特質＞

Society5.0 が基盤とする AI は、＜性質 1＞：人間を超えた能力をもつことによって、
＜性質 2＞：二つの互いに異なる空間を結び付け、言葉を介して人間に提案や指示をすることで＜性質 3＞：新たな価値を創出する

＜NBI が基盤とする神が備える特質＞

NBI が基盤とする神は、＜性質 1＞：人間を超えた能力をもつことによって、＜性質 2＞：二つの互いに異なる空間を結び付け、言葉を介して人間に提案や指示をすること、＜性質 3＞：新たな価値を創出する

並置すれば明らかなように、両者は類似性をもつ。

4 節 NBI を巡る考察

本節では前節での NBI がもつ構造の分析を踏まえて、パークリによる NBI を巡る考察を再構成していく。

NBI の導入は、『アルシフロン』第四対話がはじめてではない。それは 1709 年に出版された『視覚新論』にもみられる。しかし、『アルシフロン』第四対話における NBI と『視覚新論』における BI についての議論は重要な点で異なっている。これを確認するために、『アルシフロン』第四対話における NBI を次に引用しよう。

今までずっと目が不自由である人が、彼の案内人にあと何歩か進むと断崖の縁に行き当たるだろうとか、壁に阻まれるだろうと言われたことを想定してみよう。これは彼にとって賞賛と驚嘆に値すると思われまいであろうか。彼は死すべき者である人間にそのような予言をすることがどのようにして可能であるかは、他の人びとにとって予言が奇妙で説明できないと思われるのと彼にとっては同じ〔ように奇妙で説明できない〕からである。『視覚新論』148 節、〔 〕内は著者の挿入。

『視覚新論』における BI についての議論は、単に BI が非 BI である案内人に案内されることを想定している。ここでは BI の国は想定されていない。

確かに視覚能力が本来は驚き仰天すべきであることを示す NBI の目的を考えれば、BI の国を想定する必要はない。この意味で『視覚新論』における BI についての議論は、より目的に特化していると言える。だが観点を変えれば、『アルシフロン』第四対話で NBI が導入されたことは、単なる文飾上の変化ではなく、『視覚新論』における BI に新たな意義を付加した結果であると考えることができる。

前節でみたように、NBI は BI と非 BI の関係と予言者と小粒な哲学者をはじめとする人間の関係が相同性をもつという構造をもっていた。『視覚新論』における BI についての議論と比較すると明らかなように NBI では、BI の国という概念が付加されている。これらのことから予言者と小粒の哲学者をはじめとする人間の関係にも、国という概念が付加されていたと考えることができる。神を基盤として、非 BI である旅人が到来するこ

とによって、BI の国は大きな変化を被ったと考えられる。だとすれば神を基盤とする預言者が小粒な哲学者をはじめとするキリスト教の預言を知らない人びとの国に到来することによって、その国は大きな変化を被るはずである。この到来すべきというよりも、パークリにとって既に到来している神を基盤とした新たな社会システムを提示するという社会工学的な側面が NBI にはあると解釈することができる。

この社会工学的な側面は、NBI が基盤とする神を考え合わせるとより明確になる。既に指摘したように、非 BI である旅人と BI の関係でも預言者と小粒な哲学者をはじめとする人間の間でも、NBI では神が関係の基盤となっている、神は言葉を介して、非 BI である旅人や緒言者を通して、BI や小粒な哲学者に指示や提案をする。指示や提案が知識に基づくと考えれば、神は知識の生産者であり、非 BI である旅人と預言者は知識の伝達者、そして BI や小粒な哲学者をはじめとする人間は知識の受容者として、知識を基盤とした知識基盤社会を形成していると考えることができる。

こういった NBI が社会工学的側面をもち、その内実として知識基盤社会が与えられるとする一見すれば突飛にもみえる解釈の妥当性は、実際にこのような社会工学的な考察が『アルシフロン』第六対話で展開されていることによって担保される。こういった観点から『アルシフロン』第六対話での考察を「NBI を巡る考察」と呼び、その再構成を試みていこう。

『アルシフロン』第六対話での考察には一つの前提がある。それは知識と信仰は同意無しには成り立たないという前提である。この前提が採られていたことは、次の引用によって確認できる。

ユーフレイナー：知識と信仰は以下について一致する、すなわちそれらは心の同意を含意している。Berkeley (1948–1957, Vol. III: 303)

このように同意無しには知識も信仰も成り立たないとすれば、問題となるのはいかにして同意が形成されるかである。この点について『アルシフロン』第六対話では、目撃者の証言を具体例として考察されている。目撃者から知識を伝達されたり、その報告を信じたりする場合には、同意が形成されなくてはならない。そういった場合にどのような基準で、同意が形成されるべきかについて次のような発言がみえる。

クリトー：さてあなたは報告者の権威は報告を信じる真に適切な理由であることを認めるだろうと思います。そしてこの権威がおおきければおおきほど、その主張にわたしたちが同意することはより正しいことになります。Berkeley (1948–1957, Vol. III: 221)

この引用箇所では報告者の権威に比例して、同意の正しさが増すとされている。しかし、

この引用箇所のみからでは、ここで問題とされている権威の内実は明らかになっていない。明らかにされないままに、『アルシフロン』第六対話では次の引用にみられる「信じやすい田舎者」と名付けることのできる問題が提起される。

アルシフロン：正直で信じやすい田舎者が毎週日曜日に自分の教区の司祭に宗教的な教えを受けていたと想定してみましょう。その田舎者が神ではなく、その人〔司祭〕を信頼していることは平明にわかります。その田舎者は司祭が彼に言ったこと以外には啓示や教義や奇跡について何も知りません。もしあなたが祈祷書と聖書が彼の信仰の基盤にあると言ったとしても、困難は再び現れます。というのも儀式文集については、彼はその信仰を、両者ともに神聖な靈感をえたと間違っても主張することはできない、聖職者と国家的為政者においでいます。そして聖書については、それと祈祷書の両方への信頼を彼が正しい版から正しい模写を作ったと信じている印刷業者から得ています。そこには信仰があります。しかしそれはどのような信仰なのでしょう。司祭への信仰、国家的為政者への信仰、印刷業者、編集者、写字生への信仰、これらのどれもまちがっても神聖とはよべません。わたしはクラチュロスから手掛かりをもらいました。これは彼の矢筒の矢です。とても鋭いものですよ。Berkeley (1948–1957, Vol. III: 223)

「信じやすい田舎者」の司祭は信頼し従うに足る人物である。それは聖書における印刷業者や編集者も同様であるだろう。このような想定から「信じやすい田舎者」が問いかけているには、キリスト教を信仰しているという場合に、実際に従っているのは司祭、印刷業者あるいは編集者といった人物たちをもつ人間の権威ではないのかということである。そして本来はキリスト教の信仰は神のもつ神聖な権威に従うべきであるので、そのような人間の権威に従うのであればそれはもはや信仰ではないのではないかということである。

このアルシフロンによる問題提起に対して、ユーフレイナーは次のように答える、

ユーフレイナー：わたしも自分の手でこの矢を試してみましょう。それでは判事が判事席から法律について述べたのをあなたの田舎者が聞いたと想定してみましょう。あるいは法令集でそれを読んだと想定してみましょう。あなたは彼の信仰と服従の真のそして適切な対象は印刷業者であると思いますか、あるいは判事であると思いますか。もしくはあなたはそういった法律に忠実な行為が基盤を置き、それらが本当に終局するより高い権威を認めますか。またあなたが真であると信じるタキトゥスの文を読んでいると想定してみてください。あなたはその歴史家ではなく、印刷業者や編集者に同意していると言いますか。Berkeley (1948–1957, Vol. III: 224)

このユーフレイナーによる回答は、「信じやすい田舎者」という問題提起が、単に信仰だけの問題ではなく、同様に同意を含意する知識の問題でもあることを示唆する。ここで問題となっているのは、タキトゥスという知識の生産者、印刷業者や編集者という知識の伝達者、そして知識の受容者から成る知識基盤社会のあり方である。

さらに言えばアルシフロンによる一見すると信仰の問題に言及した問題提起も、少なくともパークリにとっては、知識の問題であったことに思いが至る。なぜかと言えば知識の生産者に神が置かれているからである。例えば天国の存在を例に採ってみよう。神にとって天国が存在するか否かは知識である。だが未だ死んでいない現世の人間にとってそれは厳密に言えば信仰でしかありえない。このように知識という現象は、狭い意味での知識の生産者をもつ知識を中核として、知識の伝達者を通して、広い意味での知識として信仰が伝わっていくことによって知識を基盤とする社会は成り立っているとパークリが考えていると捉えることができる。このことは信仰と知識が同様の構造をもつと捉えるユーフレイナーの次の発言からも垣間見える。

ユーフレイナー：私の質問はふたつの答えがあります。好きな方を選んでください。ひとつの答えからは以下のことが類比によって帰結します。わたしたちは靈感を感じたり、奇跡を目撃したりしていなくても、神聖な信仰をどのようにしてもつことができるかを容易に想うことができます。それが口頭であれ文書であれ、神聖な啓示がそれによって導かれた水路を通して、精神がその思考と服従をその源にまで運び、その信仰を人間の権威にではなく神聖な権威に、伝達のための道具や血管にではなく、その信仰の真に固有な対象としての偉大な起源それ自体に終局させることが同じように可能になります。もうひとつの答えからはあなたが一般的な懐疑論を人間の知識に導き、政府や世の中の出来事がそれに依存する要所を打ち壊すことが帰結します。一言でいえば、あなたは神聖な信仰を排除するために、人間の信頼を破壊したのです。Berkeley (1948–1957, Vol. III: 224)

ここでは知識の生産者と知識の伝達者が分けられている。両者は知識の伝達でまったく異なる役割を果たすと考えられている。だからこそそれを混同することは、知識に「一般的な懐疑論」を導き入れることになる。またこのことは知識の受容者は知識の生産者と知識の伝達者をきちんと分けて評価すべきであることも示している。知識の伝達者については、知識が正しく伝達されているかが判断基準となる。

一方で知識の生産者はどのように評価されるべきであるだろうか。その評価基準をわたしたちは既に知っている。それは知識の生産者の権威である。権威の多寡に比例して、同意するかしないかが判断される。以下で権威の内実を明らかにしていこう。

『アルシフロン』第七対話冒頭で、パークリはアルシフロンの口を借りて、『アルシフロン』第六対話での議論を総括する。その総括には次のような文言がある。

アルシフロン：誠実で能力のある目撃者の一致した証言は意義なく人間社会の諸事において大きな重みがある。Berkeley (1948–1957, Vol. III: 286)

ここで権威の程度は誠実さと能力の有無に置き換えられている。問題となるのは、NBI が基盤とする神の誠実さはともかくとして、NBI でどのような能力が問題となっているかである。これを考える際に手掛かりになるのは、視覚は神の言語であるとする説についてのクリトーの次の言及である。

クリトー：しかし、わたしはこの光学的言語が知識、叡智、そして善性と必然的結合があることは平明であると考え。Berkeley (1948–1957, Vol. III: 161)

ここで視覚という神の言語は、叡智 wisdom と必然的結合があるとされる。このことと BI と非 BI の関係がもつ相同性から考えて、預言者と小粒な哲学者の関係においても神の叡智という能力は重要になっている。

この叡智の程度について、『アルシフロン』第一対話ではつぎのような評価基準が示されている。

ユーフレイナー：それゆえに、計画された目的がどれほどより素晴らしいものであるか、そしてそれを得るために用いられた方法がどれほどより適切かによって行為者がどれほどより知恵がある者であるのかは評価されますよね。

アルシフロン：それは真であるように思われます。

Berkeley (1948–1957, Vol. III: 61)

ここで神の叡智をも含めた知恵の多寡は、計画の目的がもつ利益とそれを得るための方法がどれほど適切かを勘案することによって評価される。行為の適切さに程度が導入されていることは、行為を繰り返しおこなうことが含意されている。つまり神のより指示や提案を何度も実行してみることがここでは言われている。このことは実際に NBI で、さまざまな指示や提案が書かれていることに呼応する。

5 節 おわりに

前節でみた『アルシフロン』第六対話では、知識の生産者、知識の伝達者、そして知識の受容者からなる知識基盤社会が描かれている。知識の生産者に対する同意は、なされた提案や指示がどれほど適切に目的を達成されたかによって促される。

以上の考察を踏まえると、NBI での NBI が基盤とする神とまったく同じ位置に

Society5.0 に対して居る Society5.0 が基盤とする AI をいかに評価するかについて以下のような示唆を得られる。

まず Society5.0 において、もっとも重要になるのは Society5.0 が基盤とする AI への信頼である。さまざまに発展する AI にふれていく内に、知識の受容者である国民の信頼は醸成される。この醸成された信頼は、AI の評価の重要な基準となる可能性がある。

また信頼を獲得するためには、知識の伝達者が正しく知識を伝達しているか否かも評価基準となるだろう。いかに自身の指示や提案を正しく周知できるかも AI の可能な評価軸となるかもしれない。

さらに言えば Society5.0 が基盤とする AI は、それが掲げる目的自体がもつ利益とそれを獲得する手段の適格性によっても評価されうる。Society5.0 で掲げられている目標は精査し直す必要がある。

*本稿は JSPS 課題研究設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 JSPS001 18070707 の委託を受けたものです。

註

¹ <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index5.html>

² 第 5 期科学技術基本計画本文 1 頁

³ 第 5 期科学技術基本計画本文 1 頁

⁴ https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html

⁵ https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html

⁶ https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html

⁷ <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/5gaiyo.pdf>

⁸ <https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/5gaiyo.pdf>

⁹ https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html

¹⁰ 例えば Berman (2005:86-87)を参照。

¹¹ ここで注意をすべきことは、未だ実現していない Society5.0 に基盤を与える AI と異なって、ここでの神は既に必要とされる性質を備えているということである。だからこそバークリによる NBI についての考察を参照することで将来実現する Society5.0 に基

盤を与える AI への示唆となる。

- ¹² ここで「広い意味」という文言を使うのは、ここではパークリが考える言語としての視覚を含むからである。

<参考文献>

Berkeley (1948–1957), *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*. Thomas Nelson and Sons.

Berman (2005), *Berkeley and Irish Philosophy*. (Continuum Studies in British Philosophy), Continuum press.

内閣府、内閣府 web ページ、「Society5.0」

https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html (2020 年 1 月 31 日アクセス)

内閣府、内閣府 web ページ、「科学技術基本計画」

<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index5.html> (2020 年 1 月 31 日アクセス)

内閣府、内閣府 web ページ「第 5 期科学技術基本計画本文」

<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/5honbun.pdf> (2020 年 1 月 31 日アクセス)

内閣府、内閣府 web ページ「第 5 期科学技術基本計画の概要」

<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/5gaiyo.pdf> (2020 年 1 月 31 日アクセス)